

Life's Little Ironies における結婚の諸相

——“An Imaginative Woman” と “The Son's Veto” の主人公を中心に——

信 岡 良 奈

Shanta Dutta は、トマス・ハーディ (Thomas Hardy 1840-1928) の 2 つの短編集に収録された作品のテーマを次のように述べている。

In a majority of the stories of *A Group of Noble Dames* and *Life's Little Ironies* (1894) Hardy's major preoccupation is with the theme of marital incompatibility and the consequent loneliness and frustration of women trapped in emotionally sterile marriages. (Dutta 94)

つまり数多くの短編のテーマは、婚姻における気性の不一致とそこから生じる孤独と欲求不満に関するもので、それは作者ハーディ自身の主要関心事であると述べている。本稿で取り上げる “An Imaginative Woman” (以下 IW と省略する) と “The Son's Veto” (以下 SV と省略する) は、どちらも前述の短編集『人生の小さな皮肉』(*Life's Little Ironies* 但し、前者の初出は1912年の Wessex 版である。以下 LLI と省略する) に収録されている作品である。結婚に至るプロセスや結婚生活における環境は異にするが、どちらも女性の悲劇を描いており、その原因に相異はあるが不釣り合いな結婚をしたという点で両作品は共通している。本稿ではこれら 2 編のそれぞれの女主人公 Ella と Sophy に焦点を当て、作品中で描かれる悲劇を考察すると同時に、短編集のタイトルに提示された irony「皮肉」との関わりについても検討したい。

“An Imaginative Woman” における Ella Marchmill の場合

IW の主人公 Ella Marchmill は、空想にふけりがちな繊細で崇高な感情をもつ女性で、銃器製造業にたずさわる夫 William と 3 人の子供とともに暮らしている。経済的には恵まれた生活を送る彼女だが、夫との間に気質、趣味嗜好、価値観といった精神面に共通項を見出せないことから、その精神的不満のはけ口として読書や詩作、また持ち前の気質から生じる空想にふける日々を過ごしている。物語は、Ella 一家が避暑を送るために Upper Wessex の有名な保養地 Solentsea で貸間を探す場面から始まる。一家が間借りすることになった部屋の住人は、偶然にも、詩作を好む Ella がかねてよりその名前だけは知り、密かに関心を抱いていた新進気鋭の詩人 Robert Trewe であったのである。偶然とも言うべきこの巡り合わせに、Ella は数日前まで Trewe が暮らしていたその部屋で、壁紙に書かれた試作中の詩を思わせる走り書きや衣類、愛読書など、彼にまつわるさまざまな物に囲まれて生活し、まだ見ぬ彼への感情を、詩作を好む仲間としての憧憬から恋慕の情へと発展させていく。Ella は彼に会うことを切望しその機会を何度か試みるが、それも実現することなく、Trewe の自殺の知らせを聞いた後、その衝撃を引きずりながら第 4 子の出産後息絶える。彼女の死から 2 年後、よちよち歩きをするほどまでに成長した幼子を横にして亡き妻の書類整理をしている時、William はその中に Trewe の写真と彼のものと思われる一房の髪を見つけ、それらとそばにいる子供の外見上の類似を目にした瞬間、その子供が Trewe と妻の子だと誤解し物語は終わるのである。

Norman Page は、この短編のテーマについて “...the theme is a woman's attempt to find relief from an unsatisfactory marriage in fantasy” (Page 129) と述べているが、作品中で Hardy は、空想癖のある女性 Ella を描き、その imagination が原因で、気質、趣味嗜好、価値観において共感できない夫 William の誤解を招くというアイロニーを描いている。Ella

の悲劇は、表面上は彼女の imaginative な気質が原因だがその背景には結婚生活における問題が潜在している。つまり、ヴィクトリア朝という時代における「女性の領分」や「女性と結婚」の問題である。そして、それらを考察していくことが主人公の悲劇の解明につながると思われる。つまり、この短編が、Ella 自身の細やかで想像力豊かな気質と、彼女と夫 William との間における精神面の差異を内包する結婚生活、それは言いかえるならヴィクトリア朝という、Ella に代表される女性が生きた「環境」(environment) の物語であることを意味している。そこで、ここからは、ヴィクトリア朝におけるこれらの社会的な問題を踏まえた上で、主人公 Ella の悲劇について考察していきたい。

Ella Marchmill, the story's heroine, is at once a victim of circumstances and the builder of her own unhappy fate. Her inner life, like that of many of Ibsen's heroines, is made up of conflicting forces: romantic fantasizing and the practical business of living; intellectual and physical passion; conjugal, maternal, and Platonic love. (Brady 98)

Kristin Brady は、主人公である Ella は、気性の合わない夫との結婚生活、つまり「環境」の犠牲であると同時に自らの不運な運命の構築者でもあると述べている。そして、彼女の内なる心は、ロマンティックな空想と生活上の実際的な仕事といった相反する力から成り立っていると述べている。この相容れない心の葛藤ゆえに彼女の悲劇は起こっていくのである。避暑のため、一家が夏の間 Solentsea で間借りして過ごしている環境や、Ella が子供たちの世話の大部分を乳母に任せている場面などから、彼女の家庭がヴィクトリア朝の典型的な中産階級を表していることがうかがえる。Ella は夫に対し経済面での不満は全く感じていないが、気質や価値観における不一致を日々感じている。

In age well-balanced, in personal appearance fairly matched, and in domestic requirements conformable, in temper this couple differed, though even here they did not often clash, he [William] being equable, if not lymphatic, and she [Ella] decidedly nervous and sanguine. It was to their tastes and fancies, those smallest, greatest particulars, that no common denominator could be applied. Marchmill considered his wife's likes and inclinations somewhat silly; she considered his sordid and material. ...An impressionable, palpitating creature was Ella, shrinking humanely from detailed knowledge of her husband's trade whenever she reflected that everything he manufactured had for its purpose the destruction of life. (IW 11-12)

Ella と夫 William は、年齢も釣り合い、風采も似合い、家庭に求めるものも一致していて世間的には幸せな夫婦に見える。しかし気質においては、鈍重ではないとしても、あまり活動的とは言えない穏やかな性格の夫に対し、妻 Ella の方はやや神経質で明るく、その描写は対照的である。趣味嗜好という、夫婦間において取るに足らないが、それでいてもっとも重要な点に二人の公分母 (common denominator) をあてはめることはできなかったのである。夫は、妻の好みや傾向をいくぶん愚かなものと考え、妻の方は、夫の趣味を世俗的で物質的なものと考えている。物質主義的な気質を象徴するかのような銃器製造業という夫の職業に対し、Ella は人間の生命を破壊するものを製造する仕事と認識し、嫌悪感を抱いている。そして、彼の製造する武器のいくらかは、忌まわしい害虫や動物の根絶に使われるものもあるのだと言い聞かせ、何とか平静を取り戻すことができるのである。気質面における二人の相違は、外見上の描写にも見うけられる。

Her [Ella's] figure was small, elegant, and slight in build, tripping, or rather bounding, in movement. She was dark-eyed, and had that marvellously bright and liquid sparkle in each pupil which characterizes persons of Ella's cast of soul, and is too often a cause of heartache to the possessor's male friends, ultimately sometimes to herself. Her husband was a tall, long-featured man, with a brown beard; he had a pondering regard; and was, it must be added, usually kind and tolerant to her. He spoke in squarely shaped sentences, and was supremely satisfied with a condition of sublunary things which made weapons a necessity. (IW 12)

小柄で上品でほっそりとした体つきをした黒目の Ella に対し、夫の William は、背が高く面長で、茶色のおごひげをはやしてその描写はとても対照的である。Ella の繊細さとウィリアムの愚鈍さがより強調されている。また、身のこなしが軽快で弾むような雰囲気のエラに対し、William の方は、じっくりと物事を考えるような目をしていて、ここから、想像力豊かで純粋な Ella と世俗的で物質主義的な夫との対比がよく分かる。Ella の明るく潤んだ目の輝きは、時に男友達の胸をうずかせると同時に自分自身の心痛をも意味しているのである。この描写は、彼女のもつ純粋さがやがては自らの悲劇の一因にもなっていくことを暗示している。繊細で感受性の強い Ella と現実主義的でやや愚鈍な William との気質上の違いは、物語の最初の部分においてすでに伏線として表れている。

...he [William] returned to the hotel to find his wife. She, with the children, had rambled along the shore, and Marchmill followed in the direction indicated by the military-looking hall-porter.

'By Jove, how far you've gone! I am quite out of breath,'

Marchmill said, rather impatiently, when he came up with his wife,

who was reading as she walked, the three children being considerably further ahead with the nurse. (IW 11)

避暑地で手頃な部屋を見つけた William は、それを Ella に報告しようと妻と子供が待つホテルに戻る。しかし、ホテルの hall-porter から散歩に出かけたことを聞き、彼は彼女たちを呼びに海岸へと向かう。3 人の子供たちを連れた乳母をはるか前方にし、Ella はその後を趣味の読書しながら歩いている。空想の世界に陶酔している Ella に対し、William の方は、彼女に少し苛々しながら “By Jove, how far you’ve gone! I[William] am quite out of breath,” (IW 11) と皮肉まじりに言うのである。このような精神面における不一致が、Ella の空想的な気質と不満足な結婚生活からの逃避場所である詩作と合致し、彼女の心を Trewe に対する憧憬へと導いていったのである。Brady は、Ella の Trewe への誘引について “Ella’s attraction to Robert Trewe reflects both the incompleteness of her marriage and her failure to acquire a mature sense of her own worth. She is drawn to him by an adolescent self-absorption rather than a desire to love someone else.” (Brady 99) と述べている。つまり、Trewe に対する憧憬は、Ella の結婚の不完全さと、彼女自身の成熟した価値観の獲得における失敗の両方を反映したものなのである。では、Ella にとって「結婚」はどのようなものとして位置づけられていたのだろうか。彼女の結婚観をよく表している箇所がある。

Indeed, the necessity of getting life-leased at all cost, a cardinal virtue which all good mothers teach, kept her [Ella] from thinking of it at all till she had closed with William, had passed the honeymoon, and reached the reflecting stage. Then, like a person who has stumbled upon some object in the dark, she wondered what she had got; mentally walked round it, estimated it; whether it were rare or

common; contained gold, silver, or lead; were a clog or a pedestal, everything to her or nothing. (IW 12)

これは Ella の結婚観であると同時にヴィクトリア朝における典型的な女性の領分を表している。結婚前の Ella にとって「結婚」とは、常識的な基本徳目であると同時に終生の生活が保証される「契約」に値するものだったのである。Dutta も、ヴィクトリア朝時代の女性の結婚について「自己達成の術が他になかったので、結婚は女性の存在において最も大切なものかつ究極の目的 (the be-all) となった」(Dutta 94) と述べている。この短編 IW が創作された時代、つまりヴィクトリア朝後期は、結婚を生涯の「職業」(calling) と見なす思想が社会の主流を成していた時代から、「結婚」に求める意味が本質的に変化しようとする重要な時代にあたる。このような中で、Ella は社会における「結婚」という制度の本質に疑問を抱き、夫以外の男性 Trewe に恋愛感情を抱く画期的な女性として描かれている。

これまで、主人公 Ella の性格を成す気質と彼女を取り巻く環境、特に「結婚」に焦点をあて、短編で描かれる彼女の悲劇性について考察してきた。Ella の悲劇は、精神面に公分母を見出せない配偶者との結婚生活、それはヴィクトリア朝という特殊な因習道徳を堅持する社会における女性と結婚の問題に起因するのだが、彼女を取り巻くそのような環境と彼女自身がもつ気質が複合化した悲劇であると言える。しかし、この短編で描かれる悲劇は、Hardy の小説 *Tess of the d'Urbervilles* や *Jude the Obscure* に見られるような重苦しい洞察は見うけられない。妻 Ella の死後、残された第4子を妻と Trewe の子供と誤解して完結するこの短編の結末について、Noorul Hasan は次のように述べている。

As the time draws near she [Ella] develops a strange premonition of her death. Then she calls her husband and asks his forgiveness for

her past conduct. Soon she is dead after being delivered of her fourth child. Had the story ended there it would have been an unbearably sentimental and trite story of transgression and remorse. (Hasan 123)

第4子の出産日が近付くにつれ、Ellaは不思議にも自らの死の予兆を感じる。そして彼女は、夫に過去の行いを告白して許しを乞い、その直後に出産してまもなく亡くなる。ここで物語を終結していれば、この短編は罪と自責の念に対する感傷的でありふれた物語になっていたであろう、とHasanは述べている。この作品の中で、Hardyがもっとも強調したいものが主人公Ellaの悲劇であったとすれば、Trewéの自殺のショックを引きずったまま第4子出産後に息絶えるという結末がその目的の達成にはもっとも効果的であったはずである。しかし、その結末を、夫Williamによる妻とTrewéとの関係の誤解、さらには“Get away, you poor little brat! You are nothing to me!” (IW 32) という夫William自身の語りで物語を完結しているところに、作者であるHardy自身の創作意図が垣間見えるのである。この結末からも、短編で描かれる悲劇は小説に描かれるような重く暗いものではなく、Hardy自身が抱いていたヴィクトリア社会における女性の結婚のあり方に対する矛盾を彼特有のアイロニーで表現しているということがうかがえる。物語の表面上は、Ellaの死後、自らのimaginationが夫に誤解を与えてしまうという、言わば自分で自分の不運を導くアイロニックな悲劇を描いている。しかしEllaは、決して単なる悲劇の主人公などではなく、当時の社会において多数の女性が何の疑問をもつことなく基本道徳として教え従わされてきた、「結婚」という制度に疑問を感じ、1人の女性として自立意識を抱き、自らのidentityを求めて夫以外の男性に恋心を抱いた女性として描かれているのである。Hardyは、New Womanとも言うべきこのEllaに対し、当時の社会風潮と同様に批判するのではなく、むしろ彼女のような女性の出現を応援し、彼女の自立を擁護しているようにさえ思えるのである。その証拠にHardyは、

作品のいくつかの箇所において夫 William の愚鈍さを描いて Ella の悲劇性をいくぶん軽減している。例えば、間借りする Trewe の部屋の決定を夫 William の選択に委ねたり、結果として Ella と Trewe の共通の趣味である、詩作活動の援護にも至る妻の詩集の出版費用を William が負担したり、また、一度は避暑地を引き上げる日程を予定より早めるが、Ella の懇願によって妻と子供を残して William だけ先に帰るという描写を取り入れている。このように Hardy は、William を、Ella と Trewe との接点を作る機会を与える人物として描いている。William のこれらの行為は、間接的に Ella の Trewe に対する憧憬を加速させることにも影響している。ここからも、彼女の悲劇を好意的に見る作者 Hardy の姿勢が読み取れる。このように考えると、彼女の悲劇は、Ella 自身の結婚前後における「結婚」に対する価値観の変化が悲劇を導いているのである。IW は、そのタイトルからも分かるように「1 人の空想に富んだ女性」つまり Ella Marchmill を表している。そして同時に、このタイトルの裏には Ella と対照的な気質をもつ現実主義的な夫 William Marchmill の存在も示唆している。Hardy は、Ella を、悲劇の象徴的人物として描いているのではなく、むしろ先に述べた夫 William の、妻と Trewe を引き合わせるかのようないくつかの愚かな行為を皮肉っているようにも思える。Hardy は、Ella と Trewe との関係を疑い Ella の死の一因にもなった第 4 子を、Trewe の子供と誤解した William 自身をむしろ imaginative な男性として皮肉っていたのではないのだろうか。短編 IW は、ヴィクトリア朝における女性の領分の問題に対する Hardy 自身の疑問の描写として主人公 Ella の悲劇を描いていると同時に、妻 Ella の不貞を誤解する夫 William の愚鈍さを皮肉った物語であるとも言えるのである。そう考えると、IW というこのタイトルの裏側に、“An Imaginative Man” という William 自身を主人公にしたもう一つの隠れたタイトルも見え隠れするのである。そして、この IW というタイトルこそが、Hardy による最大の皮肉と考えられる。

“The Son's Veto” における Sophy の場合

SV (1894) は、教区司祭 (incumbent) Twycott との階級的に不均衡な結婚を基盤として、‘the repressive codes of patriarchal society which stifle natural female aspirations’ (Dutta 106) の具現化である息子 Randolph の、母親の再婚に対する拒絶から生じる主人公 Sophy の悲劇を描いている。配偶者との気質的相違に起因する Ella の悲劇とは異なり、Sophy のそれは、配偶者 Twycott との身分の相違や自らの無教養から生ずる結婚生活における悲劇である。作品内で描かれる Sophy は、IW の主人公 Ella の積極的で創造的な性格とは対照的で、受動的かつ非創造的なほとんど自身の意思を主張することのない女性として描かれている。このようななされるがまま的な性質は、Twycott からの求婚を承諾する場面ですでにその一面を表している。

Sophy did not exactly love him[Twycott], but she had a respect for him which almost amounted to veneration. Even if she had wished to get away from him she hardly dared refuse a personage so reverend and august in her eyes, and she assented forthwith to be his wife. (SV 37)

Sophy が彼との結婚を承諾したのは、愛情からではなく、自分より高い地位にある教区司祭としての彼に対する崇拜とも言える尊敬の念からである。尊敬する彼に求婚された Sophy は、身分が低く、無教養な自分を parlour-maid として Twycott 家に迎え入れてくれた、この偉大なる威厳に満ちた人物からの申し出を拒絶することはできなかったのである。Sophy のこの性格は、彼女の身分や無教養にも少なからず関係しているように思われる。結婚という、人生において重要な決断を下すべき局面のひとつにおいてでさえ Sophy は熟慮を行わない。Sophy に見られるこのような性質

は、夫となった Twycott の死後、息子 Randolph に同郷の幼なじみである Sam との再婚話を切り出す際に再び露呈する。Sam との再婚という、作品内において Sophy の唯一とも言える意思を持ち、頃合を見はからって Randolph から Sam との再婚の承諾を得ようとする彼女だが、“‘I [Randolph] am ashamed of you[Sophy] ! It will ruin me ! A miserable boor ! a churl ! a clown ! It will degrade me in the eyes of all the gentleman of England !’” (SV 45) と罵倒されると、すぐに彼女は“‘Say no more — perhaps I [Sophy] am wrong ! I will struggle against it !’ she cried miserably.” (SV 45) と尻込みし、発言を撤回する。

Twycott との結婚は彼に対する尊敬の念からであるが、一方の Twycott は、なぜ Sophy を後妻にすることを決定したのだろうか。先妻をなくしてからの Twycott は、近隣の在住地主との交流もなく、聖職禄 (college living) で孤独な隠居生活を送る。このような状況下で、Sam との結婚を理由に Sophy が辞職を請願したことがきっかけとなり、Twycott は彼にとってこれまで一使用人に過ぎなかった彼女の存在を再考する。Twycott は、“What a kitten-like, flexuous, tender creature she[Sophy] was ! ...What should he [Twycott] do if Sophy were gone ?” (SV 36) と、これまで意識することのなかった彼女に、突然奇妙とも思える不可解な親近感を抱くのである。その後、Sophy は Sam との結婚を破棄し、parlour-maid として再び Twycott に仕えるが、病氣療養中の彼に食事を運ぶ際あやまって階段を踏み外して足を不具にする。Twycott は Sophy に“‘No, Sophy; lame or not lame, I cannot let you go. You must never leave me again !’” (SV 37) と述べ、まもなく彼女と結婚する。Sophy へのこの求婚は、一見すると、自分の看病で足に不自由を負ってしまった彼女に対する自責の念や同情心によるものと推察できる。しかし、Sophy のこの不幸に先立つ、前述の彼女に対する Twycott の唐突な親近感を考慮すると、彼の求婚は、彼女に対する自責の念や慈悲心からというより、むしろ先妻をなくし40過ぎの男やもめになった自分自身の孤独に端を発したも

のではないと思われる。Brady は、求婚直前の Twycott による Sophy への不自然な感情を “his [Twycott’s] liking for her [Sophy] as ‘kitten-like, flexuous, tender creature’” (Brady 105) とし、この感情がその後の Twycott の求婚を刺激したとしていると同時に、彼の求婚について “...the basis of a marriage that takes ‘Sophy the woman’ into little account.” (Brady 105) と言及しており、Sophy の女性性を見做したものであることを示唆している。事実 Twycott は、parlour-maid であった Sophy との結婚を「社会的に自殺行為」(social suicide) (SV 37) と認識していたので、ロンドン南部の教会に在職する知人と聖職禄の交換を行い、彼女との新生活を人目に触れないようその地で始める。Sophy の性格を「非のうしろのこないもの」(spotless character) (SV 37) としながらも、Twycott には、依然としてヴィクトリア朝に浸透する階級意識への拘泥は払拭しきれなかったのである。Sophy に対する Twycott の矛盾する感情は、精神的苦悩となって結婚後の Sophy を苛む。結婚時の Sophy に対する Twycott の感情が自身の孤独を補充するもの、つまり打算的思考であったのに対し、Sophy のそれは自分より身分の高い人に対する畏敬の念によるもの、これは言い換えれば彼女の無教養や身分の低さに一端をなす軽率な判断である。

Sophy の悲劇は、Sam との再婚に対する息子 Randolph の反対も一因となっている。ここで注目したいのは、作品においてしばしば見うけられる Sophy と Randolph の親子関係の逆転である。これは、Sam との再婚話を Randolph に打ち明ける時機を見はからったり、ようやくその話題を切り出したとしても、反対されるとすぐに臆病になって発言を撤回したりする Sophy の様子からうかがえる。無教養な Sophy の言葉の誤りを Randolph が指摘する場面がある。

‘He [Twycott] have been so comfortable these last few hours that I am sure he cannot have missed us,’ she replied.

'Has, dear mother — not *have* !' exclaimed the public — school boy, with an impatient fastidiousness that was almost harsh. 'Surely you know that by this time !' (SV 34) (イタリックは本文、下線は筆者)

'has' と言うべきところを 'have' と言った Sophy の誤りを、Randolph は「厳格とも言えるほど苛立った気難しさで」注意している。また、Randolph の発言の語尾はいずれもエクスクラメーション・マーク (exclamation mark) で括られている。Sophy に対する Randolph の強い口調とエクスクラメーション・マークの使用から、親が子供を養育する一般の親子関係ではない関係がうかがえる。

Randolph は、生来ロンドン育ちなので Sophy の故郷である Gaymead について知る由もない。そして彼は、階級を重視する父親 Twycott の教育方針のもとで育っているの、父親同様階級意識に対する執着が強く、従って行く末は聖職者になることを当然の成り行きとしている。自分には伴わない「教養」を習得していく息子を誇らしげに思う反面、自分の無教養がさらに露呈されることが精神的な苦痛となる Sophy は、息子に対して絶えず羞恥心をもっている。教養面において、Randolph は母親の Sophy に優越感をもっているが、次のような場面が見られる。

His mother [Sophy] hastily adopted the correction, and did not resent his making it, or retaliate, as she might well have done, by bidding him to wipe that crumby mouth of his, whose condition had been caused by surreptitious attempts to eat a piece of cake without taking it out of the pocket wherein it lay concealed. (SV 34)

これは、Randolph が母親の言葉の誤りを訂正する直後の場面である。Sophy は、息子の指摘を受けてすぐに誤りを修正する（この時点では親子関係が逆転している）。しかし皮肉なことに、Sophy の言葉を修正した

Randolph の口には、ポケットに隠していたケーキをこっそりと口に運んでいたためにそのかけらが付着していた。教養を習得し、高い地位にこうとする野望を覗かせる世俗的な大人の一面と、本来の子供らしさを示す Randolph の二面性がうかがえる。Randolph は、Sophy から Sam との再婚話を聞いた際にも同様の態度を示す。

The youth's [Randolph's] face remained fixed for a moment; then he flashed, leant on the table, and burst into passionate tears.

His mother [Sophy] went up to him, kissed all of his face that she could get at, and patted his back as if he were still the baby he once had been, crying herself the while. (SV 44)

再婚相手の身分が低いことを知った Randolph の顔は「一瞬こわばっている」が、やがて「真っ赤になり、テーブルにうつ伏して激しく泣き始めた」のである。Randolph の描写の前半部分は、Sophy の発言を不快に感じながらも辛うじて冷静さを示しているが、後半部分は、自分に不名誉をもたらす Sophy の再婚への率直な嫌悪感を示す本来の子供の一面を示していて、これは同時に彼の 'self-centred immaturity' (Brady 105) の象徴である。

Twycott の死後、Sophy は、日頃から彼女の無知を懸念していた夫の計画的な手順のもとに、彼の存命中以上に被支配的生活を強いられる。Twycott の遺物に関しては "She [Sophy] was left with no control over anything that had been her husband's beyond her modest personal income." (SV 38) のようにいっさいの管理を禁止され、息子 Randolph の進路は "The completion of the boy's [Randolph's] course at the public school, to be followed in due time by Oxford and ordination, had been all previsioned and arranged,..." (SV 38) のようにすでに十分な準備がなされ、Sophy は Twycott から与えられた 'a semi-detached villa' で前庭の芝

生や往来する馬車を眺めて無為に時を過ごす。このような空虚生活の中、Randolph の知的成熟が増すにつれ、Sophy は自身の孤立感をいっそう募らせ、“her [Sophy’s] lost rural world where she had a place of her own” (Hasan 125) である故郷 Gaymead への郷愁にかられる。そんなある日、Covent Garden へ野菜を運ぶ同郷の Sam と再会する。以後、Sophy は家の前を通る Sam と言葉を交わすようになり、ある時には、息苦しい生活から脱却するために、彼の荷車に乗って Covent Garden まで行き束の間の精神的休息を得る。Sophy は、Sam から Gaymead の州都 Aldbrickham で ‘master greengrocer’ として身を立てたいと聞き、その後彼から求婚を受け結婚を夢見るようになる。しかし、階級を重要視する Randolph の長年に渡る反対により、Sophy は最後まで Randolph から Sam との再婚の許可を得られず、日に日に足の状態は悪化しやがて亡くなるのである。Sophy の生涯を振り返って見ると、自分とは身分の不釣り合いな Twycott との結婚を熟考することなく受け入れ、その後それが発端となって生じるあらゆる問題に苦悩する。夫 Twycott の死後、Sam との再会を果たし、故郷 Gaymead への帰還と彼との結婚を夢見るが、Randolph の強固な拒絶によりどちらも実現することなく “a misfit in the social atmosphere to which she (the ex-parlour maid) has been raised by her marriage with a vicar” (Dutta 107) のまま、都会で孤独に死を遂げている。最後まで Sophy は悲運な女性として描かれているが、彼女の葬儀は皮肉にも生存中にあれほどまで焦がれていた故郷 Gaymead で執り行われている。Twycott とともに移り住んだロンドンで葬儀をあげることが自然な流れであったであろうに、わざわざ故郷で式を執行したのは、絶えず母親に厳格な態度をとっていた Randolph による唯一の優しさであったのだろうか。また、物語の最後で “...while from the mourning-coach a young smooth-shaven priest [Randolph] in a high waistcoat looked black as a cloud at the shopkeeper [Sam] standing there.” (SV 46) と、聖職者に成りたての Randolph と思われる人物が、葬儀の列のわきでそれを見守る Sam

を睨みつける場面がある。Sam に対しては、一貫して憎悪の念を抱いているようだが、母親の故郷で葬儀をあげるという行為自体は、Sophy の再婚を心のどこかで承認していた部分が少なからずあるのではないだろうか。そのような Randolph の内的葛藤が作品の最後で見うけられ、人生の無常に対するハーディの皮肉がうかがえると同時に、Sophy の故郷への帰還が彼女の死後であったというところにもまた彼の皮肉が垣間見えるのである。

これまで、IW と SV における結婚の諸相を考察してきた。両作品における主人公は、完全に幸福な結婚生活を成し得ていないという点においては共通しているが、自らが置かれる環境を何とか打破しようと詩作や Trewe に思いを馳せる Ella に対し、Sophy には、彼女の無教養や階級の低さを危惧する夫 Twycott によってあらゆる面で権利を与えられず、まるで彼の装飾としての役割しか与えられていない環境を改善し、自己実現を遂げようという強固な意思や意欲は感じられない。この点において、両者は相違をもっている。Ella のように経済的には恵まれた結婚であっても、配偶者との気質が相容れなければその欲求不満を補充しようと別の形で精神的充足を追求し、Sophy のように階級的に不均衡な結婚であれば、ヴィクトリア朝の因習道徳やそれらを重視する人間のせいで精神的苦痛を伴った生活を強制される。このようにハーディは、Ella や Sophy という結婚生活における一つの環境に留まる主人公を題材に、万人に起き得ると思われる結婚の諸相を描き、結婚生活における真の幸福の追求、この点についてはおそらく作者自身もこの時点で納得のいく答えを導き出すことはできていなかったのであろうが、そのような日常生活における平凡なずれを描出することが作品を創作する目的の一つではなかったのかと思われる。そしてハーディは、両作品で William, Randolph といういずれも男性の登場人物に自身の皮肉を込めて主人公である女性の結婚における諸相を描いている。Page は、作品中で描かれる Randolph を ‘caricature’ とし、聖職者に対するハーディ自身の憎悪の具体化であると

述べ (Brady 106), また Dutta が “Narrative sympathy for Sophy is very transparent and authorial indignation on behalf of her wasted and stultified life comes through in the satire of Randolph...” (Dutta 107) と言う時, 作品におけるハーディの Sophy への同情は明白であり, 彼の憤りは, 人間性を剥奪する教育の象徴を意味する Randolph に対する ‘satire’ となって示されている。ハーディが夫である Willam を妻 Ella 以上に想像力に富んだ愚鈍な男とし, Randolph を, ヴィクトリア朝を象徴する因習道徳に執着した人間として描写しているとすれば, 彼は同性である男性には手厳しく, 女性に対してはどこか優しさをもって描いていたのではないだろうか。それゆえに, 十分な権利を与えられない「女性」と「結婚」という当時の社会問題には特に関心を持っていたと思われる。

本稿のうち “An Imaginative Woman” に関する論考は, 2002年11月2日(土)に日本英文学会中四国支部第55回大会 (於島根大学) にて口頭発表したものに加筆修正したものである。

参考文献

- Brady, Kristin. *The Short Stories of Thomas Hardy: Tales of Past and Present* (London: Macmillan, 1982)
- Dutta, Shanta. *Ambivalence in Hardy: A Study of his Attitude to Women* (London: Macmillan, 2000)
- Hardy, Thomas. “An Imaginative Woman”, *Life's Little Ironies and A Changed Man*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1977)
- . “The Son's Veto”, *Life's Little Ironies and A Changed Man*, The New Wessex Edition (London: Macmillan, 1977)
- Hasan, Noorul. *Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1982)
- Page, Norman. *Thomas Hardy* (London: Routledge & Kegan Paul, 1977)
- B. J. プレウィット, 松村昌家訳。『19世紀イギリスの小説と社会事情』東京: 英宝社, 1987